

四条金吾殿女房御返事

文永一二年一月二七日 五四歳

所詮^{しよせん}日本国^{にっぽんこく}の一切衆生^{いっせいしゆじやう}の目をぬき^{めをぬき}神^{たましい}をまどはかす^惑邪法^{じやほう}は真言師^{まごんし}にはすぎず。是^{こゝ}は且^{しばら}く之^{これ}を置く。十^{じゆう}諭^ゆは一切経^{いっせいきやう}と法華経^{ほふくきやう}との勝劣^{しやうりやく}を説かせ給ふと見えたれども、仏^{ぶつ}の御心^{ごこころ}はさには候はず。一切経^{いっせいきやう}の行者^{ぎやうじや}と法華経^{ほふくきやう}の行者^{ぎやうじや}とをならべて、法華経^{ほふくきやう}の行者^{ぎやうじや}は日月等^{にちげつとう}のごとし、諸経^{しよしやうとう}の行者^{ぎやうじや}は衆星^{しゆしやうせい}灯炬^{とうこ}のごとしと申す事^{こと}を詮^{せん}と思しめされて候。なにをもつてこれ^{これ}をしるとならば、第八^{たつ}の譬^{たと}への下^{した}に一つの最大事^{さいだいじ}の文^{ぶん}あり。所謂^{いわゆる}此^{こゝ}の経文^{きやうぶん}に云はく「能^{あた}く是^{こゝ}の經典^{きやうてん}を受持^{うじ}すること有らん者^{またまたか}も亦復^{また}是^{こゝ}の如^{ごと}し。一切衆生^{いっせいしゆじやう}の中に於^{またこ}て亦^{また}為^なれ第一^{だいいち}なり」等云云。此^{こゝ}の二十二字^{にじにじふにじ}は一經第一^{いっせいきやうだいいち}の肝心^{かんしん}なり、一切衆生^{いっせいしゆじやう}の目^めなり。文^{ぶん}の心^{こころ}は法華経^{ほふくきやう}の行者^{ぎやうじや}は日月^{にちげつ}・大梵王^{だいぼんのう}・仏^{ぶつ}のごとし、大日経^{だいにちきやう}の行者^{ぎやうじや}は衆星^{しゆせい}・江河^{かうが}・凡夫^{ぼんぷ}のごとしと^説かれて候^候経文^{きやうぶん}なり。されば此^{こゝ}の世^よの中^{なか}の男女僧尼^{なんにようそうに}は嫌^{きら}ふべからず、法華経^{ほふくきやう}を持^もたせ給^{たま}ふ人^{ひと}は一切衆生^{いっせいしゆじやう}のしう^{しう}とこそ仏^{ぶつ}は御^ごらん候^候らめ、梵王^{ぼんおう}・帝釈^{たいしゃく}はあをがせ給^{たま}ふらめとうれしさ申^{まを}すばかりなし。又^{また}この経文^{きやうぶん}を昼夜^{しゆじや}に案^{あん}じ朝夕^{あすけ}によみ候^候へば、常^{じやう}の法華経^{ほふくきやう}の行者^{ぎやうじや}にては候^候はぬにはんべり。「是^{こゝ}經典^{きやうてん}者^{しや}」とて者^{しや}の文字^{もんじ}はひととよみ候^候へば、此^{こゝ}の世^よの中^{なか}の比丘^{びくしゆ}・比丘尼^{びくしゆに}・優婆塞^{うぱさい}・うばい^{うばい}の中に、法華経^{ほふくきやう}を信じ^{しん}じまいらせ候^候人^{ひと}々^々か^かとみ^みまいらせ候^候へば、さにては候^候はず、次^{つぎ}下^{しも}の経文^{きやうぶん}に、此^{こゝ}の者^{しや}の文字^{もんじ}を仏^{ぶつ}かさねて^説とかせ給^{たま}ひて候^候には「若^{にやく}有^う女人^{にょにん}」と^説かれて候^候。日蓮法華経^{にちれんほふくきやう}より外^{ほか}の一切経^{いっせいきやう}を^見み候^候には、女人^{にょにん}とはなりたくも候^候はず、或^{ある}経^{きやう}には女人^{にょにん}をば地獄^{ぢやく}の使^{つか}ひと定められ、或^{ある}経^{きやう}には大蛇^{だいじや}と^説かれ、或^{ある}経^{きやう}にはまがれ木^{まがれき}のごとし、或^{ある}経^{きやう}には仏^{ぶつ}の種^{くさね}をいれる者^{しや}とこそ^説かれて候^候へ。仏法^{ぶつぽう}のみならず外典^{がいてん}にも榮啓期^{えいけいき}と申^{まを}せし者^{もの}三樂^{さんらく}をうたいし中に、無^む女樂^{にょらく}と申^{まを}して天地^{てんち}の中^{なか}に女人^{にょにん}と生まれざる事^{こと}を樂^{らく}とこそたてられて候^候へ。わざわいは三女^{さんにょ}より^起をこれりと定められて候^候に、此^{こゝ}の法華経^{ほふくきやう}計^{けい}りに、此^{こゝ}の経^{きやう}を持^もつ女人^{にょにん}は一切^{いっせい}の女人^{にょにん}に^過すぎたるのみならず、一切^{いっせい}の男子^{なんし}に^超こえたりと^詮みへて候^候。せんずるところは一切^{いっせい}の人^{ひと}に^詳そしられて候^候よりも、女人^{にょにん}の御^ごためには、いとを^愛しとをもわしき男^{おとこ}に、ふびんとを^思もわれたらんにはすぎじ。一切^{いっせい}の人^{ひと}はにくまばにくめ、釈迦^{しやくか}仏^{ぶつ}・多宝^{たぼう}仏^{ぶつ}・十方^{じふぱう}の諸^{しよ}仏^{ぶつ}乃至^{乃至}梵王^{ぼんおう}・帝釈^{たいしゃく}・日月等^{にちげつとう}にだにも、ふびんとを^講もわれまいらせなば、なにくるし。法華経^{ほふくきやう}にだにも^講ほめられたてまつりなば、なにかたつまじかるべき。

今三十三の御厄やくとて、御布施送給ふせをくりたびて候へば、釈迦仏・法華經・日天の御前まえに申しあげ候ひぬ。人の身には左右の肩あり。このかたに二つの神を坐はします。一をばどうみょうしん同名神、二をばどうしやうしん同生神と申す。此の二つの神は梵天・帝釈・日月の人を護まぼらせんがために、母の腹の内に入りしよりこのかた一生を終ををるまで、影のごとく眼のごとくつき随ひて候が、人の悪をつくり善をなしなむどし候をば、つゆちりばかりもの露塵こさず、天に訴うたへまいらせ候なるぞ。

華嚴經の文にて候を止觀の第八に天台大師よませ給へり。但し信心のよはきものをば、法華經をたも持つ女人なれども捨つるとみへて候。例せば大將軍心弱ゆわければ從したがふものも甲斐いなし。ゆみゆわければ弦つるゆるし、風ゆるなれば波小なみちひさきは自然じねんの道理だうりなり。しかるに左衛門殿さゑもんどの肩並は俗のなかには日本にかたをならぶべき物もなき法華經の信者なり。これに相連あひつれさせ給ひぬるは日本第一の女人なり。法華經の御ためには竜女とこそ思召はをぼしめされ候らめ。女と申す文字を掛ばかゝるとよみ候。藤の松にか掛り、女の男にか掛るも、今は左衛門殿を師とせさせ給ひて、法華經へ導みちびかれさせ給ひ候へ。

又三十三の厄やくは幸転じて三十三のさいはひとならせ給ふべし。七難即滅七福即生とは是なり。年若はわかうなり、福重はかさなり候べし、あなかしこ、あなかしこ。

正月二十七日

日 蓮 花 押

四条金吾殿女房御返事